

木質高層化プログラムにも貢献

システムエンジニア・加藤准一

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■「日総建」を経て

愛知県の稲沢市で生まれた加藤准一さんの父親は棟梁だったので、日常的に木材や大工道具に触れて育つ。自然に漠然とだが建築の技術者になりたいという思いが湧いてきた。1952年生まれで、名古屋大学で建築を学ぶ頃は万博もあった。学生たちは建築デザインに興味を湧いた時代。加藤さんも最初は意匠設計も考えた。が、国立代々木競技場を見て心を揺さぶられる。「自分は構造！」そう確信した加藤さん、大学院は構造へと進み、最新のRCの最適化の研究や材料の研究に没頭したのだった。

日本電信電話（NTT）の前身である日本電信電話公社が電電公社と呼ばれていた。加藤さんは卒業後その電話局の建築を主に行っていた日総建（現）に勤めた。在籍したのは5年間で短い、関連施設など多岐に渡る建築物の構造設計に当たることができたのだ。難しい鉄塔と建物との取合いは構造設計の腕の見せ所で、後のソフトウェア開発の仕事に貴重な財産となったといえます。

出向したのが、建築構造に関するプログラムの開発を行う会社の「構造システム」で、創立された1982年に加藤さんは請われてそのまま転職の決意をした。覇志堂が思い切った判断をした理由を聞くと、「構造設計に貢献したかった。自分でつくったソフトウェアで！」と即答した。時を経て構造システムの社長として業界へ貢献し、有言実行したのでした。名古屋支社での15年間があるが、社長になると東京へ単身赴任した。経営者と技術職を両輪にする時間をつくり出して12年間仕事に打ち込む。現職の取締役会長になっても、エンジニアの肩書きは外さない加藤さんだ。

構造システムは6割が技術者の会社で、建築構造ソフトをプログラミングする。同じグループに建築



計画プログラムの開発を行う建築ピボット、建物や施設の維持管理に関するプログラムの開発をするFMシステムがある。

■便利なツールをどう使うかが肝

加藤准一さんがエンジニアとしてソフトウェアをつくりはじめたのは、8ビットパソコンが使われはじめたばかりの頃。最初から関わっているから、日本のソフトウェアの歴史のほぼすべてを知っているとんでもない。加藤さんが考える構造システムが行うべき、今後の三つのポイントがある。一番は構造モデラーシリーズを完成させることで、一貫構造計算や耐震診断の最新化をより進める。次に、SNAPで技術者から求められている任意形状立体フレームの弾塑性解析の向上。そして三つ目は、特に2000年の建築技術の性能規定化以後、時代の要請で中小木造から大規模木造まで高難度になってきた木造のソフト開発。5階建建物の構造に木材を用いた建物が建てられ、日本にも大規模木造建築に風が向いてきた。企業として研究をする中で、講演でも先端の社会的な背景を語ってきた加藤さん。常に、木質構造の先端技術の開発に目を向けてきたのです。

益々高まる特に若い構造設計者のソフト使用について、どのように思うかを尋ねる。「プログラムはあくまでツール。設計者はそれで終わらずに、そこで空いた時間をよりよい建築をつくるために使ってほしいです！」その言葉に愁眉を開く覇志堂なのでした。

「研究」が趣味で来た加藤さんが、たまに子供をキャンプに連れ出したのがよい思い出になっている。今は孫も加わり、自然に触れ嬉しい時間を過ごす。意欲を増進させて、さらなるソフト開発に取り組んでいくのが「加藤流構造設計の生き方」です。